

浪江の

こころ通信

・第23号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

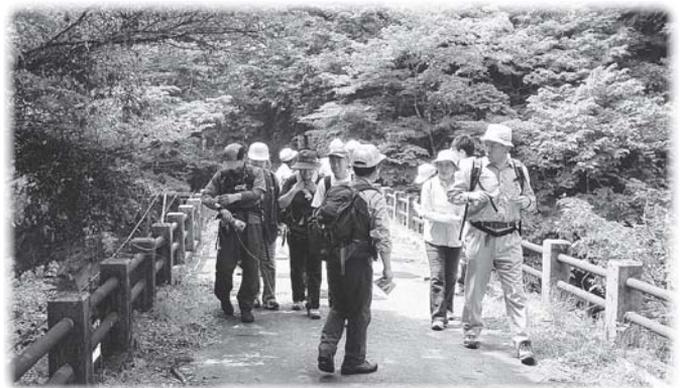
こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第23号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4218





高橋昭太郎さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：4月3日

町の皆さんの「かけはし」に



▲皆さんの所にもなみえ焼そばを販売にいきます。皆さんに会える日を楽しみにしています！

権現堂で昭和37年から、すっぽん料理店「丸福」を営んでいた高橋さん。現在、山形県米沢市で暮らしています。昨年7月、メトロ（食品卸売会社）からケータリングカーの寄贈を受け「キッチンなみえ丸福」として営業を再開し、なみえ焼そばの販売を通して町民の皆さんに懐かしい味と笑顔を届けています。

地震の後、「津波が来る」という無線を聞き、家族5人で近くの役場2階に避難しました。次の日「西のほうに逃げろ」ということを聞き、朝避難しました。津島で1晩過しましたが、母が当時93歳という高齢で体育館には長く置いておけないと思い、息子の自宅がある福島市に向かいました。息子の家に避難した人数は、親戚合わせ15名にもなりました。その後親戚を頼りに山形県米沢市に移動し、製材所を営む知人の佐藤さんのア

パートを紹介してもらい暮らしをしています。避難した当時、すぐにこの場所を提供してくださった佐藤さんには大変感謝しています。母は去年2月体調を崩したこともあり、妻と母2人飯坂町の借り上げ住宅でリハビリに行きながら元気に暮らしています。米沢から約30分の場所なので、私も行ったり来たりしています。昨年、福島県飲食業生活衛生同業組合に寄贈いただいたケータリングカー3台のうち一台をお借りし、7月から営業を再開しました。郡山市や会津若松市などの仮設住宅、山形県内のイベントなどでなみえ焼そばを移動販売しています。米沢市の観光物産協会の方に、山形県内のイベントをつないでいただき、今年は物産協会会員になり恩返しも、と考えています。事業再開について息子からは「お父さんの仕事は定年がない。神様がこの地震で定年だって辞令よこしたと思っ、後はゆっくりしてもいいんじゃないか」とも言われたのですが、自分が事業を再開し、働くことによ

と、ふり返っています。浪江では、みんなで力を合わせてまちづくりをする雰囲気もありました。商工会の原田さんとのつながりで、漁師の家5軒ほどが津島小学校の5・6年生を受け入れる民泊の体験事業などもちょうど始まった頃でした。これから盛り上がるというときに震災が来てしまったわけです。あの頃のような暮らしやまちづくりができないことが残念です。役場の方でも町の復興に向けた取り組みを進めているようですが、やっぱり自分たちのこれからは自分で決めていく必要があると思います。役場の動きを待っているのではなく、どこかで踏ん切りをつけることが大切だと思います。震災後、私たちが多くの方に助けられてここまで来ることができました。その御恩に報いるためにも、しっかり家族で力を合わせて生きていくつもりです。



舩倉 豊さん(請戸)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：4月7日

「待っているのではなく、自分たちのこれからは自分で決めることが大切だと思う」 — 1人ひとりの生活再建に求められることとして —

舩倉さんご夫妻は、おばあさんや娘さんたちと埼玉県川越市で生活しています。親戚縁者の支援もあり、震災直後の3月末には総合卸売市場に勤め始め、すでに2年以上が経過しました。お話しは、豊さん、妻の京子さんからお聞きしました。



▲左から豊さん、京子さん

震災直後の3月末に、親戚を頼って埼玉県所沢市に移動しました。そこで川越市にある総合卸売市場に野菜の詰め込みなどをする仕事を夫婦で得ることができました。仕事があることは本当にありがたいです。ただ、請戸で漁をしていた時は、仕事の時間の管理などはすべて自分でしていたのですが、今度は勝手が違うので慣れるのに苦労しました。埼玉県内の高校に進学した三女が、高校卒業後は短大

に進みたいと言っているのですが、この目標を達成するまではこの土地で暮らして行こうと思っています。でも、都会の暮らしは、やはり合わないですね。窓を開ければ近所迷惑を意識しなければならぬし、何かと気を使うことが多いです。できれば知り合いの多い福島に近くで暮らしたいと思っ、色々調べています。自分たちのこともありますが、何よりも将来、娘たちが帰ってくることでできる実家は作っておく必要があると考えています。こうして福島から外に出て暮らしてみると浪江での暮らしがどんなに良いものだったかを感じます。新鮮な魚や野菜、おいしいお米など、こちらでは味わえないですね。浪江にいた頃は、魚の切り身の無駄な部分を大胆に捨てていたのですが、随分ともったいないことをしていたのだなあ

て、3人に店で一緒に仕事をしてもらおうことができました。また、同じように被災した人にも働いてもらい、生きがいもつくることができると思いました。50年以上、朝決まった時間に起き、仕事をして寝るという生活を続けてきて、今回の震災で仕事がないことほど辛いことはないと思いましたが、私も生きがいがありました。働くことはいきいきして人間変わったようになります。何か世の中のためになるのでは、と思っ、50年以上商売しているのだから町の皆さんに言えば、お互い涙を流して昔話をし、故郷に帰れるか帰れないかの話にもなります。「いのちのかけはし」という言葉を名刺に書いていますが、食を通じて皆さんと話し、色々な悩みを聞いたり聞かせたりもできる、町の皆さんの「かけはし」になれるよう販売を続けていきたいですね。帰れるとしたら、早く浪江に帰って元気な顔で営業し皆さんに会いたいです。希望を持ち1日も早く帰れることを願っています。



福島県

木幡 瑞秋さん(北幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 阿部
取材日：4月10日

未来を信じて前に進みたい、あの日の記憶と共に

現在、木幡さん家族は別々に暮らしていますが、それぞれの土地で元気に生活をしています。

木幡さんは、以前、幾世橋で歯科医院を営んでいましたが、今年2月に福島市矢野目で再開し、忙しい毎日を送っています。

避難先で何もしないで受け身でいることに耐えられなかったこと、家族のことも考え、3月下旬には就職活動を始めました。友人の紹介もあり、秋田県能代での仕事を見つけ、家族を山形へ残し、単身で向かいました。

■あの日は診療中でした
1回目の揺れが収まり外へ出てみると、周りはひどい状況になっていました。揺れが落ち着いたらと患者さんとスタッフには帰宅してもらいました。揺れが収まった直後はまだ電気が通じていたので、情報を得てから北幾世橋の自宅へ戻りました。津波の心配もあり、家族とともに高台へ急ぎました。高台を通って移動し、避難所の幾世橋小学校へ行き、そこで両親とも合流できました。避難所では「原発の3km圏内、10km圏内の避難は」などと原発事故の話が聞こえてきたので、翌日12日には南相馬市の親戚を頼って移動しましたが、その日のお昼には妻の実家がある山形へと向かいました。

避難先で何もしないで受け身でいることに耐えられなかったこと、家族のことも考え、3月下旬には就職活動を始めました。友人の紹介もあり、秋田県能代での仕事を見つけ、家族を山形へ残し、単身で向かいました。

■これからの人生を前向きに
昨年夏に福島に戻り、福島市で歯科医院の再開の準備を始め、ようやく今年2月1日に開業しました。
患者さんたちをはじめ、今まで作り上げてきたものやいろいろなつながりが福島にはたくさんあります。やはり福島に戻るしかないと思いました。仮設住宅に近いということもあり、患者さんの多くは浪江の方です。待合室はちよつとした憩いの場になっていくようです。
現在、両親は宇都宮、息子は東京、妻と娘は仙台と、みんなばらばらに生活しています。それぞれの土地で新しい友人を作り、今の生活を充実させていきます。震災がなかったら新しい人との出会いもなかったかもしれません。状況を嘆いて後ろばかりを振り返るのではなく、でも過去のことを忘れるのではなく、前向きに今の状況を捉えて進んでいきます。前へ進んでいくしかないと思っています。



▲こわた歯科医院にて



秋田県

古農りつ子さん(酒井)

取材者：NPO法人あきたパートナーシップ 高杉
取材日：4月6日

「青春の今を生きています」 — 両親の思いも感じながら、 明日に向かって進んでいます —

震災当時、お姉さんが秋田市にいたことから、家族で避難しました。間もなく、今住む一軒家に落ち着くことができ、高校生活が始まりました。秋田の地方紙にもその活躍が取り上げられるほど、部活のスピードスケートでは活躍しています。お料理をすることが趣味の高校3年生です。青春真っ只中の彼女にお話をお聞きしました。



▲お気に入りのスケート靴を持って。

震災直後に来た当初は、秋田にすぐには馴染めなかったのですが、その年の4月から高校1年生として通学を始めることができ、クラスの仲間にも良くしてもらい、仲のいい友だちもできました。
部活はスピードスケート部に入って、頑張っていてインターハイに出て、それから国体にも出場することができました。部活は苦しいこともありましたが、楽しいことがたくさんありました。

2年生までは部活の友だちと一緒に過ごす時間が多かったのですが、大学に進学することを決めたので、これから勉強しなくてはいいませんが、まだ、はっきりした夢が持てなくて「考えなくて」と思っているところ
つい先日、浪江にいた時の中学の部活の友だち7人が福島市に集まり、すごく楽しかったです。何百回に1回とかの地震だったでしょ？それだけでなくて原

発事故もあったから、こういう運命だと思っ
うけど…。友だちが
言っていたんですけど
れど「東北の人なら
(辛抱強く粘り強い
から)乗り越えられ
る、だから東北の人
がこういう試練に遭っ
たんだ」って。そん
なことも浪江の友だ
ちとメールや手紙で
やり取りしています。
辛いことだけじゃな
くて、友だちや仲間
との絆が一層深まっ
たという実感があ

ます。でも、全国の人には「震災のことを忘れないで」と言いたいです。ボランティアもだんだん減ってきているといいますが、これからでも行ってみたい
ださい。
私の両親は農家だったので、やはり農業をいつかやりたいと思っているようです。もちろん自営で浪江の広々とした大地でやってきたのだから、今のサラリーマン生活は大変だと思いません。秋田の冬はやっぱり寒くて辛かったし、浪江がやっぱり懐かしいです。
私はまだはっきりした夢が見つかからないと言いましたが、大学は理科系を希望しています。動物や生き物が好きなので、その方面に進むことができると考えています。復興の役に立てれば、直接、浪江や福島の復興にということではないかもしれませんが、何らかの形で社会のために役立てればと、漠然とだけ考えています。



佐藤 三夫さん・桂子さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：4月12日

いつまでも家族一緒に



▲左から桂子さん、三夫さん

佐藤さんご家族は、震災後、福島県内から石川県へと移動し、現在は妻・桂子さんのお仕事の関係で、山形県酒田市で暮らしています。母・芳子さんは足が悪くなったため近くの施設に入居しましたが、今は元気に暮らしています。

■三夫さん
3月12日が父の7回忌でしたので、その準備で忙しく過ごしていた矢先の地震でした。妻は、準備のためサンプラザで買い物をしていたのですが、すぐに自宅の母のそばに帰り、私は双葉町の職場にいましたので、自宅に帰れたのは夜でした。朝になり、避難を知らせる広報車が回ってきましたがよく聞こえず、明るくなってから、避難のことは知り、小高にある私の実家に避難しました。母は寝たきりでしたので、布団ごとそのまま車に乗せ身の回りのものをまとめ、す

ぐに戻れるだろうと思家を出ました。しかし、一晩過ごした後、小高も原発から30km圏内避難指示が出て移動せざるをえませんでした。その後、小高から津島、川俣、二本松など様々な場所を転々としてきました。母は避難所では周りの方に迷惑をかけるからと、車を遣い外の車の中で過ごす夜もありました。その避難の状況を聞いた姪たちが、自分たちが嫁いだ石川が長野にきたらどうかと言ってくれ、石川県かほく市に避難することを決めました。祖母のことも心配し、ガソリンを持って新潟のサービスイリアまで迎えに来てくれ、とてもよくしてくれました。石川県で母が介護認定を受けることになりましたが、ケアマネージャーの方にとてもよくしていただき、浪江町との連絡や介護の手続きもスムーズでした。本当に感謝しています。現在、母は近くの施設に入居していますが、元気に暮らしており安心していきます。

■桂子さん
子どもの頃長く暮らしてきた幾世橋の小学校から見える風景を懐かしく思い出しますし、自宅のあった権現堂順礼川原の隣の皆さんも元気でいてくれるといいなと思います。また、佐屋前の老人会の皆さんには母が大変お世話になりました。酒田市から福島県は遠く町の方と会えず残念なのですが、町の連絡帳もできたのでお世話になった知人や友人とのつながりをこれからも大切にしたいと思っています。原発から20km圏内にあった私の職場が閉鎖となったため、同社の酒田市の事業所に移籍するかというお話をいただき、一昨年6月、家族でこちらに暮らす決心をしました。震災から2年が経ちましたが、この2年は本当に早く、はじめの4カ月は決心することや決めなくてはならないことがとても多く、あつという間に過ぎました。母も移動ばかりの状態では元気がならないと思いましたが、これからどうするかを考えているより仕事を優先し生活をするのが大切と思いました。酒田市は冬が厳しく、息子や親戚が近くにいないので不安なこともありますが、まずは母と家族と一緒に落ち着いて生活がしたいと思っています。



小野寺みどりさん(川添)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：3月23日

子どもの笑顔と夫の頑張り、そして東北人の絆に支えられて

埼玉県、二本松市での避難生活を経て、2011年8月から仙台市で暮らしている小野寺さん。ご主人が経営する会社の経理の仕事をごしながら趣味の手芸にも力を入れるなど「落ち込む暇なく頑張っています」。



▲小野寺さんご一家。左から新次さん・祥汰くん・みどりさん。手作りのスヌード(マフラー)と上履き袋を手に。

■避難に次ぐ避難の2年間
この2年間はあまりにいろいろなことがあり、長いようであるという間に過ぎた気がします。震災が起きたのは、ちょうど子どもが小学校に入学する年でした。私たち家族はすぐに都路の親戚宅に逃げ、そこにも避難命令が出たので叔父が住む埼玉県朝霞市へ。そして1カ月後、主人が南相馬で仕事を再開することになったため、二本松市の借上げ住宅に移って避難生活を送りました。でも、当時の二本松は放射線量

■子どもはサッカーに夢中
もう浪江には戻れないんじゃないか？新しい環境になじめるかしら？不安を抱えながらの引越でしたが、子どもは転校してすぐサッカーチームに入団し、お友だちもたくさんできました。初めはボールに触れることもできなかった子どもが、今日はミニゲームで何点得点を入れたよって楽しそうに話してくれたり、元気いっぱい校庭を走り回っています。そういう姿を見るのが嬉しくて、私も少しずつ前向きになれました。主人も愚痴ひとつこぼさず頑張ってくれています。会社が浪江にあり、たくさんいた従業員も散り散りになってしまったので、震災後はほとんどゼロからのスタートでした。辛いこともたくさんあるはずですが、いつも笑顔でいてくれる。だから私も頑張れるんです。

■手芸、そして新しい喜び
最近の私の日常は、子どもが学校に行っている間に主人の会社の経理の仕事をし、時間があると編み物や縫い物をしたり、お母さん仲間とランチに出かけたりと、それなりに充実した毎日を送っています。手芸を始めたのは仙台で暮らし始めてからです。ミシンを買って子どもが学校で使う袋物を縫ったり、マフラーを編んだり。震災前より仕事が減ったし、1人でいる時間が増えた分、何かやっけないと落ち着かないというか、時間を無にしたいなかつたんです。でも始めたら面白くて、ハマってしまいました。材料の毛糸や布を探して歩く時間も楽しいし、甥や姪に手作りの品をプレゼントするとすごく喜んでくれるんです。その顔を見るのが嬉しくて。学校行事を通じて私もお友だちが増えました。浪江出身のお母さんとも親しくしていますし、気の合う方が多いのは同じ東北人だからかもしれません。震災を経て、かえって絆が深まった気がします。仙台は私たちの第2の故郷になりつつありますが、距離的に離れてしまった浪江のお友だちとも、いつか会える日が来ると信じています。どうかお元気で頑張ってください。